

「家庭の日」 作文コンクール入賞者

毎月第3日曜の「家庭の日」を啓発する事業として「家庭の日」作文コンクールを実施したところ、582人から応募があり、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

☎ 生涯学習課 (☎62-1036)

【最優秀】 6人

「わが家の七五三」板倉彩恵（かりがね小4年）

「あばとじいじにおくる階だんアート」翠茉彩子（衣浦小5年）

「家族の良さ」福田芽唯（亀城小6年）

「ぶどうと共に過ごした夏休み」鈴木千愛（富士松中1年）

「自分の小ささ」鈴木右作（富士松中2年）

「日常」西尾結人（朝日中3年）

【優秀】 6人

「ぼくの弟は家族の太陽」眞下悠翔（東刈谷小4年）

「オレという人間」鈴木翔登（双葉小5年）

「三つの光る線」井上裕子（富士松東小6年）

「困った名前だけ最高の名前」石徹白詠介（依佐美中1年）

「おばあちゃん」長谷川颯那（朝日中2年）

「祖母の笑顔」毛利漣那（刈谷南中3年）

【入選】 46人

松尾一輝・原田大我（亀城小）、橋本紗苗・篠原立樹・和田梨央（小

高原小）、村岡茴香・多田准聖（日高小）、中川大靖・谷端夕依

（衣浦小）、山田陽翔・加納茉晴・佐藤匠真（住吉小）、江口拓弥・

小坂幹汰（かりがね小）、稲田隼人・近藤新・佐々木夢子（平

成小）、戸田倫太郎・村山可恋・杉山陽菜（富士松南小）、野々

山瑠七・柏木みあ・塚本瑠妃（富士松北小）、入江葉璃・日向

佳穂（富士松東小）、山田湊太・堂園颯真（小垣江小）、田中柊羽・

尾崎成美（双葉小）、高木美来・林唯（東刈谷小）、湯ノ迫千春・

神谷彪史・内藤龍（朝日小）、原田咲希・田中柚帆（刈谷南中）、

野中颯佑・加藤碧太・竹川菜月（刈谷東中）、菅原彩羽（富士

松中）、田中皇翔・中園亮太・西澤ももか（雁が音中）、内村悠大・

山田夢唯（依佐美中）、山本瑚々奈（朝日中）

最優秀

「日常」

西尾結人

八月八日の木曜日、ニュースは一斉に緊迫した様子で伝えていた。今まで「いつかは来る」と言われていた南海トラフ地震がいつに

来ると。僕はそう感じた。

母は立ち上がったままニュースを見ていた。そしてしばらくして、以前から玄関のクローゼットにしまわれていた防災リュックの中身をチェックし始めた。

「地震本当に来るの？やばい？」

「分からないけれど……。その可能性が普段より高まっているから気をつけなさい。」

我が家の電話が置いてある棚には、中学二年生の時に、姉と僕が技術の授業で作成した二台のラジオと、姉が小学五年生の時に学校で作成した「東刈谷オリジナル防災手帳」が紐で繋がれて引っかけてある。それは三つラス分あり、それぞれが工夫を凝らして作られている。普段見ることはないが、何気なくめくって見た。そこにはけがの手当の仕方や地域の防災マップ、安否の確認方法、また、小学校や避難所の具体的な設備などが書かれていた。改めて、僕たちは防災を学び続けていたんだなと感じた。ここまで、学校で防災に関する学びをするということは、本当に巨大地震は来るのだらうと恐ろしくなった。

次の日も塾があった。少しだけそわそわしたけれど、何事もなく一日が過ぎた。スーパーでは水が売り切れていたと母が言っていた。父はガソリンを入れておいた方がいいかもなと言っていた。日常を送りながら、普段より意識を高めて過ごすことが必要らしい。ベッドの横にスニーカーとホイッスルが置かれていた。過去の地震では、生き埋めになった人が多かったとのことだった。

「生き埋めになったら、このホイッスルを鳴らすんだよ。」

僕は生き埋めになった気持ちでホイッスルを吹いてみた。そんな瞬間が来るなんて、今は信じられないけれど、

「わかった」

と言って、母を安心させた。本当に地震が来たら、今の日常は全く変わってしまうのだろう。キッチンではいつもどおり、母が夕飯の支度をしている。首に冷やしたリングみたいなのを付けている。今年の夏は、いつも以上に暑い気がする。そう思ったら真夏の避難生活が地獄になることは容易に想像できた。

それから何日か、日常の中に非日常がある日々を過ごしながら、夏休みは進んでいった。ドラッグストアにも水が並ぶようになった。夕飯時に進路のこともよく話題に上がるようになり、正直考えることが多くて現実逃避してしまう。この調子だと出校日は問題なく訪れるだろう。明日は必ず来て、夏休みぎりぎりに課題を終わらせ、あつと言つ間に中学を卒業するのだろう。高校生になることを誰も疑わない。日常は当たり前すぎるそこにあるものだと思っているから。

でも、当たり前はあつという間に変わってしまうことも知っている。事故や病気になるかもしれない。当たり前のように健康で、毎日ベッドで眠れることは、もしかしたらすごく恵まれているのかもしれない。

今回、「南海トラフ巨大地震騒動」で、家族で防災対策と当たり前に過ごしている幸せな生活について、何度も話し合うきっかけとなった。できれば、このまま何事もなかったことを強く願う。僕の日常はきっと、これから家族と一緒に続くのだから。